

「振り返り」を振り返る

——「反省」から「振り返り」へ——

水落いづみ

要旨

最近「反省」という語に替わって、「振り返り」という語が使われるようになってきた。「反省」は1902年から論文のタイトルに使われているが、「振り返り」は1984年からである。「振り返り」に新しい意味が生まれることによって、この二語は共通する意味を持つようになった。「反省」が「悪いと認める」という意義が中心となったことにより、入れ替わるようになってきたと考えられる。

【キーワード】 語の入れ替わり 振り返り 反省

1. はじめに

2018年4月、職場の会議の議題の表現が「反省」から「振り返り」に変わった。例えば「入学式の反省」が「入学式の振り返り」のような形である。筆者は、この「振り返り」には非常に違和感があった。その理由は以下の二点である。「振り返り」は動詞「振り返る」連用形の名詞的用法であるが、「振り返り」という名詞的用法が一般的に受容されているのだろうか、という点。「振り返り」だと思い出としてただ「振り返る」だけで、「反省」は行われず、次年度に向けての改善点も見いだされないのではないかという点である。

とは言え、行事実施後に、その内容について評価し、次年度に向けての改善点を挙げるという実際に行う内容に変化はない。ではなぜ、「振り返り」が選ばれるようになったのだろうか。

その後、2022年4月に甲子園球場に併設された甲子園歴史館で阪神タイガース企画展「激闘のシーズン振り返り」⁽¹⁾という展示が行われた。この企画展の前年である2021年は阪神タイガースが最後の最後に優勝を逃したのだが、展示はそのシーズンについてだけでなく、それ以前の話のシーズンについても展示し、前年の失敗には焦点をあてない企画であった。その後、2022年8月には阪神タイガース企画展「俊足の虎戦士たちと2022年シーズン振り返り」⁽²⁾が開催されていた。「振り返り」は想像以上に受容されているのだと考えられる。

そこで本稿では、「反省」と「振り返り」の使用状況を比較し、現代日本語での「振り返り」の役割を探りたい。

2. 論文タイトルによる調査

実際に「振り返り」と「反省」はどのように使用されているのか、「CiNii Articles - 日本の論文をさがす」⁴⁾のタイトル検索でその変化を見た。双方が名詞として用いられているものに限定するために「～の振り返り」、「～の反省」で検索した。その結果が図1である。

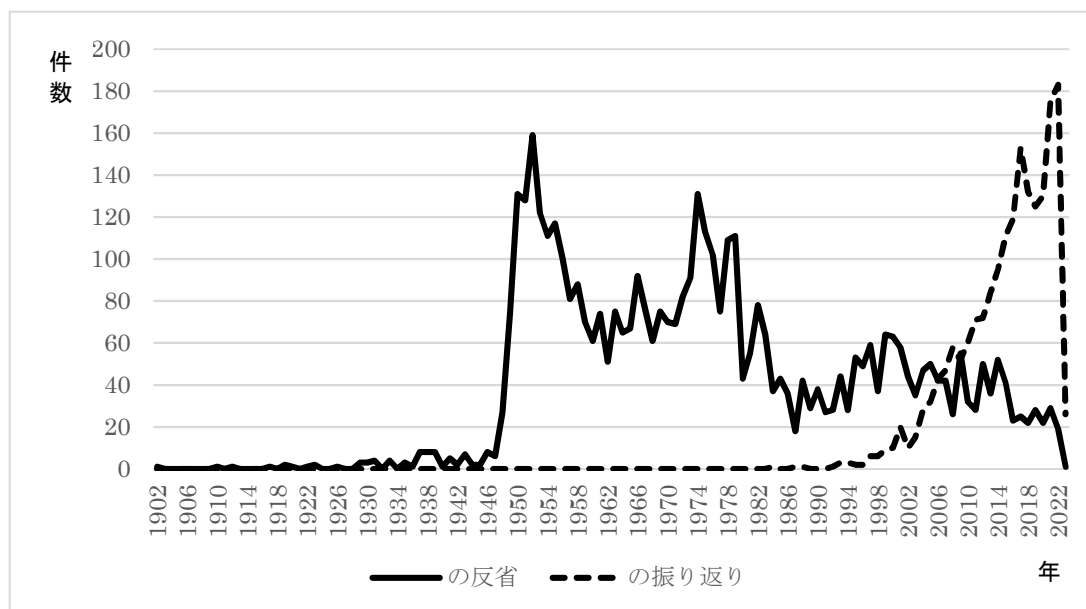


図1 CiNii Articles「の反省」、「の振り返り」を含むタイトルの件数の変化(1902～2023年)

「の反省」を含むタイトルは出版年が不明のものを除いて4,687件であった。1902年に登場し、1947年までは件数もさほど多くなく年間10件を超えることはないが、1948年に27件を数えたのを皮切りに増加していき、1952年には159件を数えている。1960年代は60件程度で推移していたが、1970年代には再び100件を超えている。その後は下がり始め、2010年代は20件前後で推移している。内容は政治、経済、経営、教育、行政、犯罪捜査、歴史、医療、技術、文学、看護、災害対策など多岐に及んでいる。

一方、「の振り返り」(「のふりかえり」を含む)は1,886件である。1984年に現れ「の反省」と比べると80年遅く、2000年までは年間の件数は一桁である。その後、急激に増え始め2015年には111件になり、2021年には175件、2022年には183件に上っている。

「の反省」が減少しているのと反比例するように「の振り返り」をタイトルに含む論文が増えている。内容は2014年までは教育、看護、介護、医療のみで、2016年ごろから労働問題、技術、インフラ整備、環境問題などが現れているが、全体から見ればわずかである。「の振り返り」は限られた分野で使用される用語ということがわかる。

3. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』による調査

実際に文章では「の振り返り」と「の反省」はどのように使用されているのか、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』⁽⁴⁾ (BCCWJ: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese) で使用頻度を見た。その結果が図 2 である。

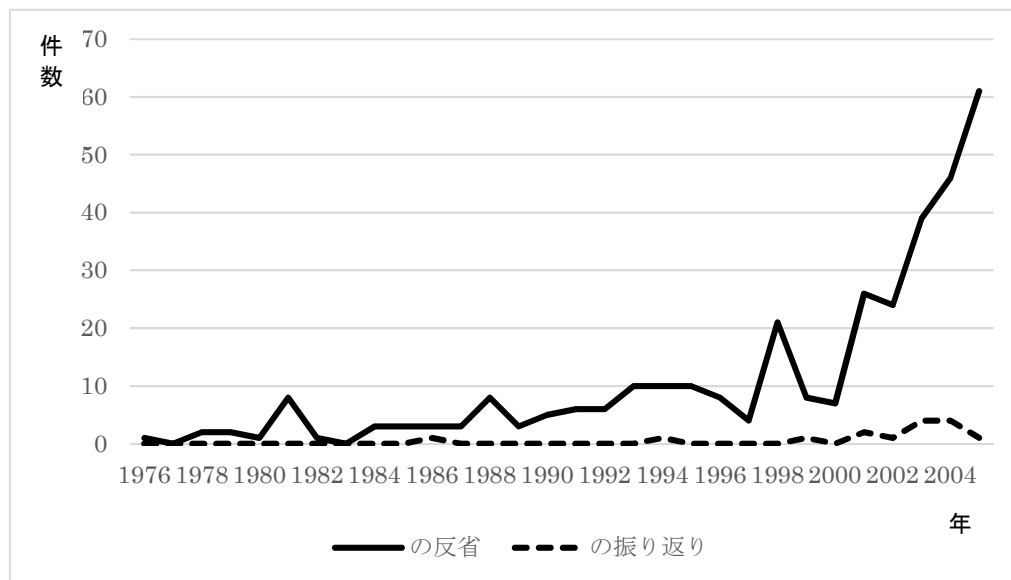


図 2 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における「の反省」、「の振り返り」の使用件数の変化 (1976～2005 年)

「の反省」の用例は総数 329 件である。1976 年から現れ、次第に増加し、1993 年に 2 桁になり、2005 年には 60 件を超えている。「の振り返り」は 1986 年に 1 件現れ、1994 年まではしばらく見られないが、その後 2001 年からは少しずつ増えている。しかし、2 桁には至らない。総数も 15 件のみである。前述の論文タイトルでは 2000 年から「の振り返り」が増加し、「の反省」を凌いでいるが、書き言葉コーパスではそのような変化は見られない。文章の中では「の振り返り」はあまり出現しないと考えられる。

4. 「振り返り」とは何か—辞書による意味記述

「振り返り」はどのような意味だと、一般的に捉えられているのか。辞書の記述から見ていきたい。表 1 に挙げたのは、7 種類の国語辞典の意味記述である。そのうち『三省堂国語辞典』については、最新版の第八版だけでなく、第六版、第七版についても取り上げた。

語義が二つあるものと、三つあるもの、「振り返り」を名詞として記述しているかどうかの違いがある。

表 1 辞書による「振り返る」の意味記述

	辞書名	版	出版年	意味記述
①	国語大辞典 (小学館)	新装版	1988	⊖『自ラ五(四)』 後ろの方に向く。首を回して顔を後ろに向ける。ふり向く。※浄・百日曾我一三「時宗ふり返りきつと見て」 ⊖『他ラ五(四)』 過ぎ去ったことを改めて思い浮かべる。かえりみる。回顧する。「一年を振り返る」
②	旺文社国語辞典 (旺文社)	第十一版	2013	(他五) ①うしろをふりむく。かえりみる。「立ち止まって一」 ②過ぎた昔を思う。回想する。かえりみる。「入学当時を一」
③	広辞苑 (岩波書店)	第7版	2018	『自五』 ①顔を背後に向けて見る。ふりむく。 「一・り、一・り遠ざかる」 ②過去をかえりみる。回顧する。 「一・れば長い年月だった」
④	岩波国語辞典 (岩波書店)	第八版	2019	『五他』 ①顔を後ろに向けてみる。 「声のした方を一・った。」 ②比喩的に、回顧する。「過去を一」
⑤	新明解国語辞典 (三省堂)	第八版	2020	(他五) ⊖〈(どこヲ)一〉振り向く。「思わず一」 ⊖〈なに・どこヲ〉過ぎて来た跡を思い出して見る。 「△過去(来し方・歴史)を一」
⑥	明鏡国語辞典 (大修館書店)	第三版	2020	[他五] ①顔や上体を後ろに向ける。「後ろを一」 ②過ぎ去った事柄を思い返す。回顧する。 「学生時代を一」
⑦	三省堂国語辞典 (三省堂)	第六版	2008	(他五) ①[うしろを] ふりむく。 ②[過去のことを] 思い出す。「試合の経過を一」
		第七版	2014	(他五) ①[うしろを] ふりむく。 ②[過去のことを] 思い出す。「試合の経過を一」 名 振り返り。
		第八版	2022	『他五』 ①[後ろを] ふりむく。 ②[過去のことを] どうだったか、と思い出す。 「学生時代を一」 ③[過去や自分のことを] 改めて見(て、よかったかどうかなどを考え)る。「試合の経過を一・今週の業務を一・わが身を一 [=反省する]」 名 振り返り。 可能 振り返れる。

語義が「具体的な動作」と「過去を思い出す」の二つであるものは①から⑦の第七版まで、「振り返り」を名詞として取り上げているのは⑦の第七版(2014)からである。⑦の第

八版(2022)では語義が一つ増え、「[過去や自分のことを] 改めて見(て、よかったかどうかなどを考え)る。」という、「反省」の類義となるものを取り上げられている。

5. 「反省」とは何か―辞書による意味記述

一方、「反省」はどのような意味だと、一般的に捉えられているのだろうか。ここでも、辞書の記述から見ていきたい。表2に挙げたのは、7種類の国語辞典である。

表2 辞書による「反省」の意味記述

	辞書名	版	出版年	意味記述
①	国語大辞典 (小学館)	新装版	1988	①自己の過去の言動についての可否、善悪などを考えること。自分の行為をかえりみること。 ②心理学などで、単に外的事物を認知するだけでなく、すでにもっている経験・知覚・観念の関係に注意し、問題の解決を求めて思考すること。
②	旺文社国語辞典	第十一版	2013	(名・他スル) 自分の過去の言動をかえりみて、悪い点を認めたり、また悪い点がなかったかどうかを考えること。 「一を促す」「一の色が見える」「一日を一する」
③	広辞苑 (岩波書店)	第7版	2018	①自分の行いをかえりみること。自分の過去の行為について考察し、批判的な評価を加えること。 ②[哲](reflection)自己の内面的な精神生活または心的状態に意識とくに注意の作用を向けること。デカルト以降の近代哲学はこれを方法とし、反省によって得られる自己意識の確実性を知の根拠とした。晩年のフッサールは、反省する自我と反省される自我の分裂など、反省にまつわる方法的困難の克服を、時間性の次元において試みた。
④	岩波国語辞典 (岩波書店)	第八版	2019	【名・ス他】 一般的などらえ方や自分の行動・あり方を振り返って、それでよいか考えること。 「定説に一を加える」「日常を一する」「一点」
⑤	新明解国語辞典 (三省堂)	第八版	2020	一する(他サ) 〈なにヲ一する〉自分の今までの言動・あり方について、可否を考えてみること。 「一を促す(求める・生かす)／一の色も見られない／一が足りない」
⑥	明鏡国語辞典 (大修館書店)	第三版	2020	[名・他サ変] ①自らを省みて、悪い点がなかったかどうかを考えること。 「わが身を一して悔恨の思いに泣く」「日々一を怠らない」 ②みづからを省みて、自分が悪いことをしたとはっきりと認めること。 「私が悪かったと一する」 「不祥事を招いたことを深く一する」 「言い訳ばかりで一の色が見られない」
⑦	三省堂国語辞典 (三省堂)	第八版	2022	【名・他サ】 自分の考え方やおこないを振り返(って、悪かったと考える)ること。 「自分の態度を一する・一の色がない・試合後の一会」

第一義に「自分の過去を顧みる」ことがあるのは共通しているが、第二義に心理学・哲学の用語を挙げているものが①と③、第二義に「みずからを省みて、自分が悪いことをしたとはっきりと認めること。」という「自分が悪かったこと認める」点を挙げているものが⑥である。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』⁽⁵⁾の2005年の例をとると、動詞として使用されている「反省する」の235例のうち、「自分が悪かったことを認める」意と考えられる例は210例であり全体の9割近い。これを現在の一般的な使われ方だと考えると「反省する」の意義は、この⑥の第二義が中心になるのではないかと思われる。

6. 「反省」から「振り返り」への置き換えについて

以上のように、「反省」が明治時代から使用されてきたのに対して、「振り返り」は80年代から使用されている比較的新しい用法である。国語辞典の意味記述の変遷から考えられることは、「反省」も「振り返る」も過去を顧みることであるが、「反省」では「自分の非を認める」という意味が重要となり、「振り返る」に「よかったかどうか考える」という「反省」の第一義に共通する意義が現れることによって、「悪いと認める」だけの「反省」が避けられ、「振り返り」が選ばれるようになったのではないかと考えられる。

7. 今後の課題

今回、「反省」と「振り返り」を比べる過程で、なぜ「反省」がこのようによく使われる語になっているのか疑問を持った。前述したように「反省」は「振り返り」と比べると古い語だが、明治以前の用例は寡聞にして見つけられなかった。今後、「反省」の始まりと定着について解明できたらと考える。

注

- (1)甲子園歴史館「激闘のシーズン振り返り」(2022)
(<https://koshien-rekishikan.hanshin.co.jp/event/tigers2022spr/>)(2023年3月21日取得)
- (2)甲子園歴史館「俊足の虎戦士たちと2022年シーズン振り返り」(2022)
(<https://koshien-rekishikan.hanshin.co.jp/event/tigers2022aut/>)(2023年3月21日取得)
- (3)国立情報学研究所「CiNii Articles - 日本の論文をさがす」(<https://ci.nii.ac.jp/>)(2023年3月21日取得)
- (4)言語資源開発センター『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ:Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese) (<https://shonagon.ninjal.ac.jp/>) (2023年4月24日取得)
- (5)言語資源開発センター『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ:Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese) (<https://shonagon.ninjal.ac.jp/>) (2023年5月18日取得)

参考文献

- (1)北原保雄(2020)『明鏡国語辞典(第三版)』大修館書店
- (2)見坊豪紀、金田一京助、金田一春彦、柴田武、市川孝、飛田良文(2008)『三省堂国語辞典第六版』三省堂

- (3)見坊豪紀、市川孝、飛田良文、山崎誠、飯間浩明、塩田雄大(2014)『三省堂国語辞典第七版』三省堂
- (4)見坊豪紀、市川孝、飛田良文、山崎誠、飯間浩明、塩田雄大(2022)『三省堂国語辞典第八版』三省堂
- (5)言語資源開発センター『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ:Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese) (<https://shonagon.ninjal.ac.jp>) (2023年4月24日、5月18日取得)
- (6)国立情報学研究所「CiNii Articles - 日本の論文をさがす」(<https://ci.nii.ac.jp>)(2023年3月21日取得)
- (7)尚学図書(1988)『国語大辞典(新装版)』小学館
- (8)新村出(2018)『広辞苑(第七版)』岩波書店
- (9)西尾実、岩淵悦太郎、水谷静夫、柏野和佳子、星野和子、丸山直子 (2019)『岩波国語辞典(第八版)』岩波書店
- (10)山口明穂、和田利政、池田和臣(2013)『旺文社国語辞典[第十一版]』旺文社
- (11)山田忠雄、倉持保男、上善道、山田明雄、井島正博、笹原宏之 (2020)『新明解国語辞典(第八版)』三省堂